

「第二言語作文のプロセスモデルの構築」パイロット調査報告

石毛順子

要旨

石毛 (2008) では、日本語学習者の作文過程が明らかとなったが、参加者の人数が少なかったことと母語が韓国語に限られていたことが課題として残された。本研究は、石毛 (2008) の結果をより一般化するために参加者を増やし、中国語母語話者、英語母語話者を対象に加えた研究「第二言語作文のプロセスモデルの構築」のパイロット調査の報告である。中国語母語話者・英語母語話者による日本語作文過程の発話プロトコルを、母語使用の観点から分析し新たなカテゴリーを作成し、石毛 (2008) でのカテゴリーと対応させた。その結果、石毛 (2008) でのカテゴリーでは違いが明確にならないプロトコルのカテゴリーが現れた。これらの結果から、今後のカテゴリー作成においては、母語使用の視点を取り入れることが必要であると思われる。

キーワード

作文過程、発話思考法、英語母語話者、中国語母語話者

1. 問題と目的

1. 1 本研究の位置づけ

石毛 (2008) は発話思考法を用いて、日本語学習者の作文過程を明らかにした。その結果、日本語のレベルの観点から見ると、初級では母語使用、中級では「作文がうまく書けない」というような負の自己評価、上級では辞書使用が多く見られた。作文のレベルの観点から見ると、内容に関する評点の中程度の人も母語を使っていることや、作文のレベルの高い人が辞書や下書きを使用し、また編集や読み返しを行っていることが明らかになった。

しかし、石毛 (2008) においては学習者が作文過程で母語を使用していることは明らかとなったが、どのように母語を使用しているのかということについては述べられていない。また、参加者の母語は韓国語のみであり、人数も6名と少なかった。したがって、結果を一般化するにはもっと多様な母語の学習者を参加者とし、また参加人数を増やす必要があると思われた。そのため、2009年度より参加者の母語を英語・中国語・韓国語、人数を約50名とした科学研究費若手研究(B)「第二言語作文のプロセスモデルの構築」(研究課題番号21720189)に着手し、石毛(2008)の結果を一般化することに取り組んでいる。本研究は、そのパイロット調査の報告である。

1. 2 目的

本研究の目的は、石毛 (2008) で扱われなかった英語母語話者・中国語母語話者の結果を予測することである。特に、母語使用の実態に注目して分析を行いたい。

2. 方法

2. 1 参加者

中国語を母語とする上級日本語学習者 3 名と、英語を母語とする中級日本語学習者 3 名であった。

2. 2 調査期間、実施場所

2009 年 7 月、調査者の研究室で調査は行われた。

2. 3 作文のテーマ

参加者は、「自国の食べ物（食生活）と日本の食べ物（食生活）」「自国の住居と日本の住居」「男と女」、「映画とビデオ」、「田舎の生活と都会の生活」「車と自転車」「高校生活と大学生活」という 7 つの比較のテーマの中から 1 つを自由に選択して作文を行うことが求められた。テーマの提示が多いのは、テーマによる書きにくさをできるだけ排除し、参加者が持つ作文の能力を最大限発揮できるようにするためであった。「自国の食べ物（食生活）と日本の食べ物（食生活）」「自国の住居と日本の住居」「男と女」は第二言語習得における作文の発達を扱った石橋（2002）、「映画とビデオ」、「田舎の生活と都会の生活」「車と自転車」「高校生活と大学生活」は同様の Kobayashi & Rinnert（1992）で用いられたテーマであった。

2. 4 手続き

まず、作文時にどんなことを考え、どのようにふるまうのかを知るために調査を行っているということを説明し、そのため、作文を行う時に考えていることを日本語でも母語でもよいので、できる限り話すよう依頼した。それから、発話思考法の練習を行った。練習で用いられたものは、四則計算、母語での作文、日本語の作文であった。

約 1 時間の練習後、実験を行った。実験はビデオで撮影され、IC レコーダーで録音された。まず作文用紙が渡され、テーマが提示された。辞書や携帯の変換機能の使用など、作文に参加者が必要とするものは全て許可されていた。実験に入る際に、参加者が沈黙してしまった際は、話すようにカードで指示するという教示がなされた。

2. 5 分析方法

参加者の書いた作文とメモを補助資料としながら発話プロトコルを作成し、特徴的なプロトコルをカテゴリー分けした。発話プロトコルの母語部分は、参加者本人が文字起こしを行い、参加者と調査者が協力して翻訳を行った。

3. 結果と考察

本研究の目的は、石毛（2008）で扱わなかった英語母語話者・中国語母語話者の結果を予測することであった。

3. 1 発話カテゴリー

参加者の発話プロトコルを、母語使用に注目して分析した結果、以下の5カテゴリーの結果が得られた。() 内の斜体の文は、発話された中国語を日本語に翻訳したものである。

1. 日本語で書いたものを母語で読み返す

発話例

- ・勉強、でき、なかった、oops, かった、ああ、全部、全部、全部、やさしす、全部やさしすぎました。それで、それから、それで、それで、それから、から、what? Never studied, homework was really easy、
- ・車について、んーと、あんまり考えていませんけど、考えていません。I didn't think about the impact of using a car. 考えていません

2. 一文の書き方に対して言及する

発話例

- ・ I don't know if it is good to start a sentence with 「でも」、「けど」。
English も starting a sentence with but or and がダメですから、

3. 作文の進め方に対して言及する

発話例

- ・ Where to start?
- ・ 起承轉合 (起承転結)
- ・ 來寫結論好了…結論…結論…結論應該? (今結論を書こう。結論 結論 結論は何?)
- ・ (今まで書いた部分を確認する) What else to talk about, uh, Let's see, talked about high school, mountain bike, college, college has more classes,

4. 母語から日本語へ翻訳する

発話例

- ・ at that time、何、そのとき、かな
- ・ 田舎生活 (田舎生活)、幸運な、…、田舎生活、田舎、異なる、

この発話は、辞書を使用せずに行われていたものであった。もともと日本語の単語を知っているが、すぐにその単語を思い出すことができず、母語を経由したと考えられる。

5. 英語の単語から外来語に置き換える

発話例

- ・ 絶対に、その家の、appearance, appearance, うーん、アピアランスを、こめて、
- ・ 日本の家は、もっとも、practical, practical, プラクチカルに、になってしまいます。

この発話は、英語母語話者のみに見られた。ただし、2例とも外来語としての使い方は正しくなかった。英語が外来語として日本語に取り入れられていることを知っているため、

日本語で思いつかない単語をカタカナに変換してみたのだろう。しかし、もともとの英語があらわす意味範囲と、日本語の外来語として取り入れられたときの意味範囲が異なっていたことにより、誤った使用例となってしまうていた。

3. 2 まとめ

石毛 (2008) で用いられたカテゴリーを表 1 に示す。そのカテゴリーに本稿のカテゴリーをあてはめながら、今後のカテゴリー作成の参考とする。「1. 1 本稿の位置づけ」で述べたように、石毛 (2008) では母語に関しては使用したか否かだけを述べ、発話のカテゴリー分けにおいては母語／日本語の区別をせずに分類していた。

表1 行動カテゴリー名、定義、例

カテゴリー名	定義	発話例
評価	試行や書かれた語句分に対するメタ言語的な発話、文章産出過程での書き手のメタ認知的発話	わからない；形（という漢字）も知らないですか；「なので」（という言葉）を使い過ぎですね
編集	書いた作文に対する行動として、挿入、削除などの編集が行われたもの	
外部リソースによる助け	辞書や携帯を使う、テーマの書いてある紙を見て漢字を確認する	
計画	文章構造、内容、方略についての立案	（テーマを）決めました；じゃあ最後の話（を書こう）
書いた文、文の一部を読み返す	書いた文を読んでもみる。母語の場合もある	（書いた文を読む）日本の道はちょっと狭いですが、自転車に乗りやすいです
語、句を繰り返す	試行中・作文用紙に書いている時・読み返している時、その語や句を繰り返す。「発話しながら書く→読み返す」との違いは、前の語や句との間にポーズがないことである。「試行」との違いは、「試行」が徐々に変化するのに対して、「語、句を繰り返す」ではまったく同じ形で繰り返されることである。	映画、映画；興味、興味
試行	頭の中にあることの言語化の過程で、書いてみる前に、表現したい内容、意味が適切に言語化されるように試している。	<u>韓国へ、韓国を、韓国で、韓国に</u> いるとき； <u>ひといち、ひとより、愛情を持っている</u> と思います。； <u>ちょっと、迷いますが、迷う。</u> <u>迷ってますが、</u> ；※言語化されるが、すぐに書かれなかった場合は「発話しながら書く」ではなく「試行」とする
課題を読む	作文の課題を読むこと	車と自転車、うーん、高校生活と大学生活、車と自転車
下書きを参照する	別の紙に書いた下書きやメモを読むこと	
発話しながら書く	作文用紙に発話しながら文字化すること	

「1. 日本語で書いたものを母語で読み返す」は、石毛（2008）では「書いた文、文の一部を読み返す」に分類される。石毛（2008）では日本語での読み返しのほかに、日本語と語順において類似性のある韓国語で読み返しがなされていたが、本研究では語順において類似性のない英語でも読み返しが行われていた。「2. 一文の書き方に対して言及する」の発話例は表 1「評価」の発話例『「なので」を使いすぎですね』と類似しており、「評価」に分類される。「3. 作文の進め方に対して言及する」の発話例は表 1「じゃあ最後の

話（を書こう）」に類似しており、「計画」に分類される。「4. 母語から日本語へ翻訳する」は、石毛(2008)では表1「試行」の定義に当てはまるため、「試行」に分類される。「5. 英語の単語から外来語へ置き換える」は韓国語母語話者を対象とした石毛(2008)では見られなかった新たな発話プロトコルの例であるが、4と同様に「試行」に分類されるだろう。

4. 本調査での課題

このように5つのカテゴリーを石毛(2008)に当てはめてみたが、新たに得られた発話プロトコルのカテゴリー「5. 英語の単語から外来語へ置き換える」は「4. 母語から日本語へ翻訳する」と同じ「試行」のカテゴリーとなってしまう、違いを表すことができなかった。このカテゴリーは、英語母語話者特有のものである可能性があるため、本調査では特に注意し、新たなカテゴリーを定義する必要があるだろう。また、「試行」のカテゴリーに分類されるプロトコルも、第1回目の試行が母語であるのか、それとも日本語であるのかということは分析課題になると思われる。さらに、そのほかの表1でカテゴリー分けされた行動においても、母語で行うのか、それとも日本語で行うのかということをも明らかにすることによって、作文過程において母語によるサポートをどの段階で行えばいいのかということが示唆されるであろう。したがって、今後のカテゴリー作成においては、母語使用の視点を取り入れることが必要であると思われる。

(いしげじゅんこ・国際教養大学・ishige@aiu.ac.jp)

付記

本研究は科学研究費若手研究(B)「第二言語作文のプロセスモデルの構築」(研究課題番号21720189)の助成を受けたものである。

参考文献

- 石毛順子(2008)「第二言語習得における作文教育の意義と特殊性」 2007年度東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程論文
- 石橋玲子(2002)『第2言語習得における第1言語の関与』 風間書房
- KOBAYASHI, H. & RINNERT, C. (1992) Effects of first Language on second language writing: Translation versus Direct Composition. *Language Learning* 42, 183-215.